ＳＭＣ金融・経済マーケットレポート

Reporter Your Financial Brain　SMC 豊島 健治

消えゆく金融債に思う
（産業構造変化の中で）

……モノを信用していればコトがすんだ産業資本主義時代の金融とくらべて、ヒトを信用しなければならないポスト産業資本主義時代の金融は、はるかに努力も知力も要求される仕事であるわけです……（岩井 克人）

今月１４日、みずほコーポレート銀行が来年３月を以て金融債の法人向け発行を停止すると発表した。新聞によって取扱が違っていたので気づかなかった方もいるかもしれないが、金融債発行停止を聞いて、私は「これで名実共に長信銀は消滅したんだな」とある種名状し難い感慨を覚えた。

金融債はその名の通り金融機関が発行する債券であるが、その発行は長信銀３行（日本興銀、長銀、日債銀）とその他一部金融機関にだけ認められてきた日本の戦後金融経済を象徴する債券だった。

常に資金が不足していた戦後経済において、安定的に企業への長期融資を担うのが長信銀の使命だったが、その長信銀が長期融資の原資を調達する手段が金融債だった。金融債は個人にも発行されたが、都銀や地銀・信金等が主な買い手だった。銀行が金融債を安定的に買うことで、銀行が個人等から集めた預金が効率的に長信銀に流れた。そうして集めた資金を巨額の資金を必要とした電力、鉄鋼、造船等戦後日本経済の成長を担った重厚長大型企業に振り向けた。そして、長信銀の発行する５年物金融債に０．９％を加えた金利が、長らく長プラと呼ばれる日本の長期金利の指標となったのだ。

ご承知のように、しかし、その長信銀３行はいずれも今はその名を消した。長銀と日債銀は破綻し新生銀行とあおぞら銀行へと姿を変えた。日本興業銀行は富士銀、第一勧銀と合併しみずほＦＧ内のみずほコーポレート銀行となった。いずれもかつての長信銀の面影はない。かろうじて繋がっているのは金融債だけだった。その金融債が間もなく終わる。これで漸く長信銀は完全に歴史の波間に消え去ることとなる。

長信銀の消滅は、冒頭の岩井克人さんの言葉に従えば、産業資本主義からポスト産業資本主義への移行の過程で、その使命、その役割が縮小した証左であった。９１年発覚した日本興銀の「料亭女将巨額融資事件」は長信銀の困難な時代を象徴していた。その意味で、長信銀が不動産とノンバンク融資にのめり込み解体消滅したのは歴史の必然だったのかもしれない。

しかし、翻って、私達が親しく付き合っている普通の金融機関（大手銀行から地銀、信金まで）は長信銀と違ってポスト産業資本主義時代をどう生き抜いて行くのだろうか。

もう１０年以上も前のことだが、三國陽夫さんが「銀行は高級質屋である」と看破したことが今でも鮮明に記憶に残っている。有担保主義を「質草に値段を付ける行為と同じ」と見抜いた三國さんの銀行質屋論は、私が銀行員として生きてきた時代を正鵠に射抜いていた。それはまさしく岩井さん云うところの「モノを信用していればコトがすんだ産業資本主義時代の金融」だったのだ。今、「はるかに努力も知力も要求される」「ヒトを信用しなければならない」時代を迎えている。果たして銀行は高級質屋からどう脱皮していくのだろうか。

私にはよく判らないが、おそらく当の銀行も良く判らないのが実情ではないだろうか。報じられる所によれば、銀行の貸出姿勢も積極的になり貸出残高も底を打ったという。全体として見ればそう云えるかもしれないが、法人向け事業資金に限っていえば私は依然懐疑的である。

今、銀行融資が伸びているのは住宅公庫代替の個人向け住宅ローン（４～５兆円残高増加に寄与）と不動産ファンド（法人）向け融資の拡大が要因と見ている。既にお分かりと思うが、そのどちらも「モノを信用する」金融の延長線にある。未だ、「モノを信用する」融資より遙かに難しい「ヒトを信用する」融資に舵を切っているとは到底思えない。

２１日、日経平均が過去最高値を付けた８９年末からその約３分の１となった９月２０日迄の１６年間、東証一部上場企業で株価が上昇した企業１０９社が新聞紙上にランキングされていた。１位は１，３７８％のヤマダ電機だったが、それから続く１０９社の中に、銀行や電力、あるいは造船、鉄鋼は１社も顔を出していなかった。１６年間の株式市場における株価上昇企業の顔触れは、日本の産業構造が大きく変化したことを物語っているようだった。

《複製・転載等はご連絡下さい》

TEL. 0438−53−6092 FAX. 0438−53−6096
URL: http://www.hi-ho.ne.jp/smc_toyo/　Email：smc_toyo@hi-ho.ne.jp